

ヴァカンスは ちゃんと とりましたか？

ウィーンに限らずヨーロッパの人々にとって「毎年のヴァカンスをどのように有意義に過ごすか」は何ものにも代え難い、人生そのものに関わる程の重大事だ。

勤め先が認めてくれる夏休みは日本の一般水準に比較して、かなりゆつたりしている。1週間の休暇で満足するのはかえって恥ずかしいぐらい、2〜3週間は当たり前で、4週間の休みをとる人もざらである。

たとえば秋口に体調を崩してしまい、医者^の世話になったとする。問診でまず最初に聞かれるのは、「ヴァカンスはちゃんととりましたか？」という点だ。「いやー、仕事がちよつと忙しくて休めませんでした」などと答えようものなら、病状うんぬんの本題に移る前に「だから病気になるのですよ。今からでも良いから休みをとりなさい！」と怒られてしまう。

我々音楽家のように自由業をい

となむ人間は、いづれだけ休もうが勝手である。しかし会社や役所などの組織、それも重要なポストについていなければならないほど、自分が休んでは他人に迷惑がかかる心配するのは典型的な日本人的発想であるらしい。

こちらの人間は他人の迷惑などはお構いなしに、自分の都合だけで休みをとる。その間にたとえ組織の機能が実質上停止してしまっても、「どこ吹く風」だ。自分の持つ権利に対する執着は日本での想像の比ではない。

この「権利の主張」にまつわる習慣は、海外の人間とつき合っていく日本人にとってストレスのものになりやすい。

「不言実行」とばかりにみずから犠牲的精神を発揮し、人のためにつくしたとしても、それが認められる事はあまりないだろう。

「言わなくてもわかってくれるだろう」などという希望的観測は甘い。「自分は君のためを思ってこれこれのことをやるのである。それをちゃんと記憶にとどめて感謝するように」と明言してから行動に移らないと自分が損をする。

——とは言っても、実際にこれをやる日本人は見ていてあまりスマートではないが…。

自分を主張し、弁護できる、というのは欧米では子供の頃からのしつけのポイントだ。

何か子供が怒られるような悪い事をして、ただ無条件に「ごめんなさい」とあやまるのが良いのではなく、「自分にはこれこれの理由があつてこのような事態に至つた」と説明できるように育てるのが親の役目。その後はじめて「その行動は果たして適切であつたか」という価値判断になる。

私はこのところ毎夏8月にイタリアのある海水浴場で行われる国際コンクールの審査員をつとめている。フィナーレ・リグレという小さな町だが、ここでは毎年この時期にピアノ、ピアノデュオ、ヴァイオリン、チェロ、歌、ギターその他のコンクールが行われる。それと並行してコンサートがあつたり、海水浴場にははめずらしく文化レベルの高い所なのだ。たとえコンクールに失敗しても海で泳いでうさ晴らしができる、というメリットもあるが、それよりも愛すべきは、こののんびりとした雰囲気だ。「ヴァカンス」と「コンクール」、受ける本人にとっては両立しにくくとも、一般聴衆にとっては恰好のアトラクションである。



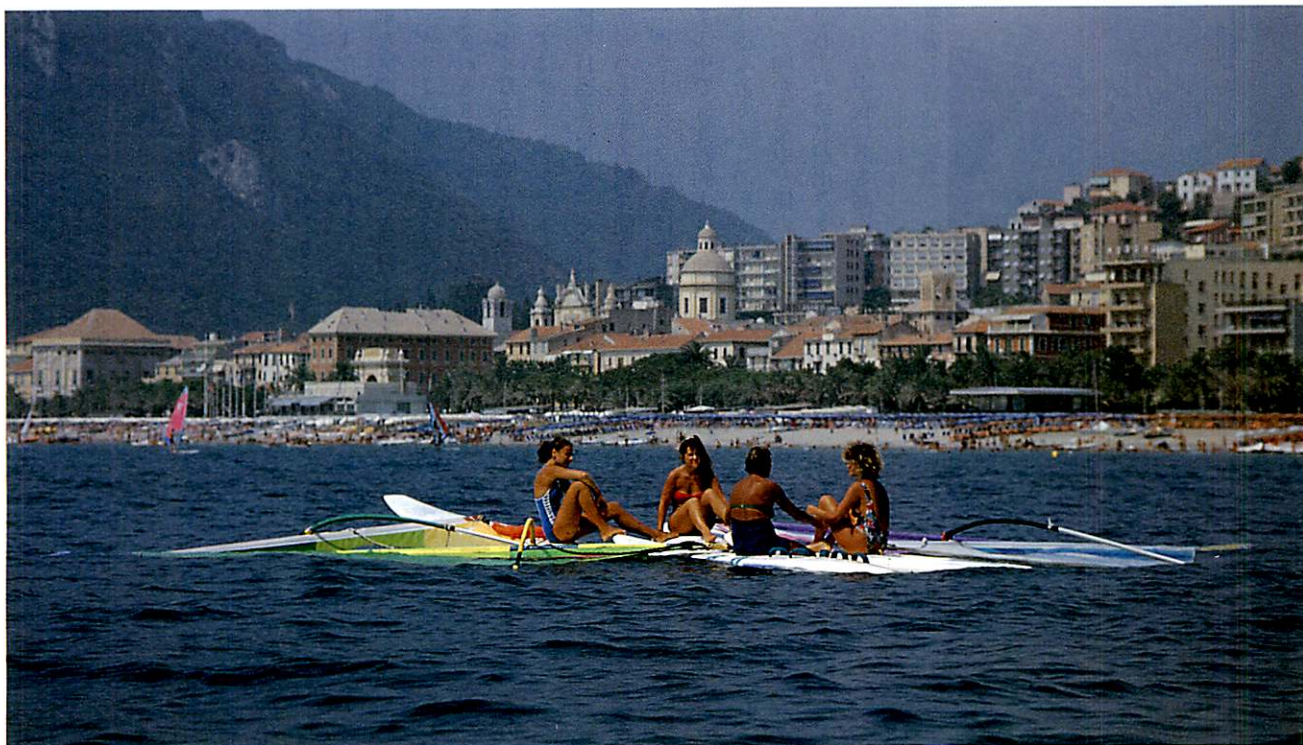
修道院の中庭がコンクール会場のロビーとなる



街角でコンクールの垂れ幕が目につく



国際音楽コンクールのポスター



地中海沿岸のリゾート地、フィナーレ・リグレの海辺